



「不安や悩みを共有したい」と話す小野さん
別府市の湯のまち訪問看護ステーション

がんの悩み話し 心ひとやすみ

又分合同新聞
2014. 9. 21

別府市南立石生目町の湯のまち訪問看護ステーションは、市内や周辺に住むがん患者や家族、遺族らが集まり、悩みや不安を話し合う「ひとやすみ」ミニ「サロン」を定期的に開催している。参加者同士が話し合うことで生きがいや、やりがいを育てることに役立っている。

ステーションでは毎月第4土曜日に患者と家族、がんを家族とくした人らが集まる。「家族に負担を掛け、申し訳なく感じる」「がんの家族とどう接したらいいか」などの悩み、他の参加者が経験を伝える。

毎月第4日 患者や家族ら集う

（一）「日出町」は「相談者同士に連帯感と思いやりがあり、優しい雰囲気。経験を聞いた相手がほっとした顔をしてくれらると、私自身、やりがいや生きがいを感じる」と話す。

相談によつては専門家を招いて学習会を開くなど、内容は参加者と話し合いながら決めている。看護施設でがんサロンを開いているのは珍しいという。

ステーションの管理者で、看護師の小野朱美さんは「自宅療養中のがん患者が身近な場所ですぐに相談できる場所をつくりたい」と話している。サロンで考え方の幅を広げ、つらい気持ちを和らげるきっかけにしてほしい」としている。（金田満里子）

9月のサロンは特別企画で、27日午前10時から正午まで、日出町大神の大神ファームで開く。申し込みは24日まで。10月以降はステーションで開く。問い合わせは湯のまち訪問看護ステーション内のサロン（0977-24-2226）へ。

別府・湯のまち訪問看護ステーション

がん患者、家族、遺族、看護師らが、がんの悩みを語り合うサロンを別府市南立石生目町の「湯のまち訪問看護ステーション」が今年3月に始めた。毎月第4土曜午前10時～正午、15人前後が闘病に関する情報を交換し、不安や迷いの解消に役立っている。【大島透】



見聞録

がん患者、家族、遺族……

訪問看護ステーションは、介護が必要な人への自宅へ看護師を派遣する事業所で、全国各地にある。同ステーション代表の小野朱美さんは派遣の看護師として、機会が多くなった。そこでは、介護が必要な人への自宅へ看護師を派遣する事業所で、全国各地にある。同ステーション代表の小野朱美さんは派遣の看護師として、

言葉交わし 不安減らす

て長年、お年寄りの介護を続けてきた。近年は「最期を自宅で迎えたい」と希望するがん患者が増え、高齢者だけでなく、がん患者と家族を支える師が加わった。入院中のがん患者の周囲には同病の仲間がいるが、退院すれば会う機会はない。大腸がんが肺に転移したという男性は「病院に

「会話を大切にしてほしい。人間は言葉を使う動物であり、言葉交換するだけでも視野が広がり、肩の荷がおりたり、不安が軽くなったりするのだと、取材を通じて痛感した。小野代表は「新しく来た人たちが、さっさとらんに語り合えるよう、敷居を低くする雰囲気作り」に「一層力を入れたい」と語った。連絡は同ステーション0977-80-7222。次回サロンは11月22日に開く。

毎日新聞
2014. 10. 31